

## 金沢スイーツセミナー1

### 形態のエキスパートを目指して

“血球形態・骨髓像の見方の基本、そしてアプローチの方法”

安藤 秀実<sup>1</sup>, 後藤 文彦<sup>2</sup>, 常名 政弘<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 日本大学病院 臨床検査部

<sup>2</sup> NTT 東日本関東病院 臨床検査部

<sup>3</sup> 東京大学医学部附属病院 検査部

骨髓像を含む血球形態検査は古くから血液疾患診断の基本である。現在でも末梢血液像、骨髓像が判定できることは血液疾患診療に係わる医師、血液検査に係わる臨床検査技師にとって必須の技術、知識であることに変わりはない。一方、2017年に再々改訂された。悪性血液疾患 WHO 分類の基本は、血球形態より腫瘍性増殖している血液細胞の細胞起源などを遺伝子変異、染色体分析、細胞表面マーカーなど形態以外の情報を用いる分類が主になっている。そのため、遺伝子変異や染色体分析、さらには細胞表面マーカーなどの情報を得るため骨髓穿刺検査は、形態観察の骨髓像検査とともに検体採取としてどうしても必要である。しかし、検査血液学会に参加されている方々の大多数の施設では、急性白血病などは末梢血液像、骨髓像検査のみで診断して治療を開始し、細胞表面マーカー、染色体、遺伝子検査などの結果がそろった時点で WHO 分類を行っている施設が多数を占めるのが現状である。そのため骨髓像観察から情報を正確に読み取るための基本的な血球形態、骨髓の読み方・判定などの知識とともに遺伝子変異や染色体分析、さらには細胞表面マーカーなどの知識も必要になっている。一方、血液疾患を診療している医師は、これらの多数の情報を総合して判断しなくてはならないため、血球形態観察に習熟していない医師も増えているのが現実である。そのため、臨床検査技師が正確な形態情報を正しい表現で報告することの重要性は非常に大きくなっている。今回も経験豊富な骨髓検査技師 3 名に症例を通じて基本的な血球形態、骨髓像の見方、考え方のみでなく、最新の細胞表面マーカー、遺伝子検査所見と形態の関係などについても紹介する予定である。十年以上続けている参加型のセミナー形式で、参加して頂いた皆様とともに近年ますます重要になっている血球形態、骨髓像の見方・考え方の技術・知識の習得を目指したい。